

令和元年6月27日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02803

研究課題名(和文) LINEをプラットフォームとした多言語多文化社会におけるネットワーク構築

研究課題名(英文) LINE-based Communication in Multi-lingual/Multi-cultural Society

研究代表者

佐々木 泰子 (Sasaki, Yasuko)

お茶の水女子大学・基幹研究院・教授

研究者番号：20251689

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では日本語母語話者同士、留学生同士及び母語話者と留学生とのLINEでのやり取りで使用される日本語に着目した。会話分析の結果からは音声による会話とは異なり、「目で見る」会話、「記録性のある」メディアであるという特性を生かして相づちや感動詞を配置することによって、非同期的なやり取りをあたかも同期的なやり取り、つまり音声による会話をしているように参加者がふるまっていることを明らかにした。LINE会話で多様なモードが使用されるのは人びとが日常性の中で意味実現を志向していることの現れであり、今後のコミュニケーション研究におけるマルチモーダルアプローチの重要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

LINEなどのソーシャルネットワークサービスに代表される新しい社会的ネットワーク構築システムは、急速にグローバル化する社会において人間関係を築く重要なツールとされる。これらのツールの中でもLINEは留学生にとって日常のコミュニケーションで欠くことのできないものとなっている。本研究では日本語母語話者同士、留学生同士及び母語話者と留学生とのLINEでのやり取りで使用される日本語に着目し、会話分析及びマルチモーダルアプローチの観点から、インターネット上の新たなコミュニケーションスタイルの実態を明らかにし、多文化間コミュニケーションの新たな可能性の一端を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：For clarification of the characteristics of LINE conversation, we analyzed the Japanese used in LINE. The results were as follows. Firstly, though LINE conversation is a conversation in word form, people use LINE as if it were verbal communication. One of the main characteristics of LINE conversation is that it is a recorded communication, such as using backchannels and interjections eg. ' ああ ' the same way as verbal conversation. Secondly people use emoji and stamps for adding emotion to their word conversation. Japanese tend to use emoji and stamps more than Chinese and Koreans.

研究分野：社会言語学

キーワード：LINE コミュニケーション 会話分析 マルチモーダルアプローチ 談話管理 日本語 中国語 韓国語

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

社会の急速なグローバル化に伴い、LINE などの SNS に代表されるインターネットを介したコミュニケーションは重要性を増してきている。中でもメッセージ交換が中心となる LINE は近年急速に普及し、ほとんどの留学生にとって日本国内や母国の友人との重要なコミュニケーション手段となっていることが指摘されている(佐々木 2015)。

LINE などインターネットを介したコミュニケーションで使われる言葉は、「打ちことば」と呼ばれ、話し言葉に近い特徴を持つとされる(田中 2014)。しかし、文字を使う、音声を伴わない、発話の重なりが見られないなど話し言葉とは異なる言語使用や会話のルールが存在することが想定される。それでは、LINE の会話を構成する言葉はどのようなものなのか、LINE の会話のルールはどのようなものなのか、そしてそれは話し言葉のルールとはどのように違うのか、また LINE の会話が成立するために参加者はどのように振る舞うことによって秩序を生み出しているのか、さらに加えて母語話者同士、留学生同士、母語話者と留学生のそれぞれの会話は同じなのか、異なる点があるとすればどのような点なのかなど、その実態はほとんど明らかにされていない。

### 2. 研究の目的

LINE などのソーシャルネットワークサービス(以下 SNS)に代表される新しい社会的ネットワーク構築システムは、急速にグローバル化する社会において人間関係を築く重要なツールとされる。これらのツールの中でも LINE は留学生にとって日常のコミュニケーションで欠くことのできないものとなっている(佐々木 2015a)。本研究では日本語母語話者(以下母語話者)同士、留学生同士及び母語話者と留学生との LINE でのやり取りで使用される日本語に着目し、会話分析及びマルチモーダル・アプローチの観点から、インターネット上の新たなコミュニケーションスタイルの実態を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) データ

本研究は、親しい女性友人同士による 2 者間の LINE、WeChat、KakaoTalk のチャットの会話を分析対象とする。収集したデータは、日本語母語場面(LINE) 20 組、中国語母語場面(WeChat) 10 組、韓国語母語場面(KakaoTalk) 20 組、日中接触場面(LINE 及び WeChat) 10 組、日韓接触場面(LINE 及び WeChat) 10 組である。年齢については、20 代及び 30 代の LINE 利用率が特に高いことを考慮し、20 代を中心にデータを収集した。

#### (2) 分析の方法

本研究では日本語母語話者同士、留学生同士及び母語話者と留学生との LINE でのやり取りで使用される日本語に着目し、会話分析及びマルチモーダル・アプローチの観点から、分析を行った。

### 4. 研究成果

分析の結果、以下のような結論を得た。

(1) LINE の会話において、母語場面と接触場面の母語話者の相づちの働きは異なっており、接触場面において母語話者の調整が行われる。具体的には、接触場面において母語話者は、非母語話者とのやり取りで理解に齟齬が起らないよう、相手のメッセージに対する理解の表示、談話の展開のわかりやすさを重視して、相づちの使い方を調整していることが明らかになった。

(2) 中国語では、形式と機能のいずれにおいても日本語の「あ」と類似している感動詞「啊」または「唉」「哦」が存在するにも関わらず、中国語のチャットではほとんど使用されない、ということを確認し、そこから日本語のチャットでは、「即効的表現」を多用するという先行研究の指摘を裏付けた。加えて、「あ」のような「即効的表現」は、声を生み出すだけでなく、チャットの効率的なやり取りを調整するという談話管理上の働きがあることを指摘した。

(3) 日韓の相づちの比較から相づちの LINE 会話における談話管理上の機能が明らかになった。つまり、「記録性のある」メディアという特性を利用し、非同期的なやり取りをあたかも同期的なやり取りをしているように見せる機能であることを指摘した。

(4) 文字テキスト、絵文字、スタンプの分析の結果から、日本語は共感構築的メッセージの割合

が多く、中国語は情報交換的メッセージの割合が高い。日本語母語話者は、連絡事項や決め事をする等の情報交換的やり取りが中心となりやすい場面でも、気持ち・感情を伝える発話が生み出されやすいように会話をデザインし、共感構築的文脈が創出されやすいようにしている。他方で、中国語では、「情報交換的やり取りの文脈が維持され、継続される傾向にある」ということが明らかになった。

(5)LINE 会話において多様なモードが使われる理由として、まず、細かなニュアンスを伝えるモードを簡単かつ手軽に、労力をかけずに利用することを可能にした技術面でのサポートが挙げられる。次に、微妙なニュアンスや気持ちを伝えることが重要とされる日本語・日本文化が影響していることが考えられる。最後に、西洋の文字言語崇拜に対する日本の文字と絵の一体化の志向も要因として指摘される。シェルトン&岡山(2006)では、日本では源氏物語、江戸の絵入り小説、浮世絵、書など文学や芸術の様々な分野で文字と絵がほぼ対等な地位を保ち、絵と文字の距離が非常に近いと述べている。そのような志向が、LINE では文字だけでなく多様なモードが使われて会話が行われることと無関係ではないであろう。

クレスは授業における多様なモードの重要性を主張しているが、奥泉(2017)も言語だけでなく色やかたち、デザインを国語の授業に取り入れることで「学習者は、教科書で習った文字や表記システムを資源として、社会的実践において新たな価値や秩序を意味構築し、自らもその再デザインの過程に参加していくようなことばとのかかわりをするができるようになる」(l.c.:108,109)として、授業におけるマルチモーダル・アプローチの重要性を説いている。

新たなメディアが次々と生みだされている現在、日本語教育においても言語だけでなく多様なモードがコンテキストと織りなす意味を理解し、LINE 会話におけるように、学習者自身もそれらを用いて意味の構成に関われるようなアプローチが求められることを指摘した。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 4 件)

倉田芳弥(2018)「接触場面の LINE の会話における相づちの機能 - 日本語母語話者と非母語話者の比較から - 」『お茶の水女子大学 人文科学研究』14 pp.83-97 査読有

倉田芳弥(2018)「LINE チャットの会話における相づちの働き - 「機能」及び談話管理を巡る方略的観点から - 」『言語文化と日本語教育』第 53 号 pp.1-10 査読有

楊虹・佐々木泰子・倉田芳弥(2018)「メッセージングアプリを利用したチャットの会話の中日比較」『日本語教育と日本学研究 - 大学日本語教育研究国際検討会論文集 (2017)』pp.112-118 査読有

加納なおみ・佐々木泰子・楊虹・船戸はるな(2017)「「打ち言葉」における句点の役割 - 日本人大学生の LINE メッセージを巡る一考察 - 」『お茶の水女子大学 人文科学研究』13 pp.27-40 査読有

### 〔学会発表〕(計 8 件)

佐々木泰子(2018)「LINE の中のジャポニズム - 女子学生のスマホの会話から - 」第 26 回 ひと・ことばフォーラム

楊虹・佐々木泰子・倉田芳弥(2018)「メッセージングアプリを利用したチャットの会話における感動詞「あ」の分析」2018 年日本語教育と日本学研究国際検討会 『2018 年日本語教育と日本学研究国際検討会論文集』pp.159-161

佐々木泰子(2018)「マルチモーダル・アプローチによる LINE 会話の分析」韓国日本学会

倉田芳弥・佐々木泰子・加納なおみ・楊虹(2017)「接触場面の LINE の会話における母語話者の相づちの特徴 - 母語場面との比較から - 」第 53 回日本言語文化学会『言語文化と日本語教育』第 53 号 pp.65-68

佐々木泰子(2017)「日本におけるソーシャルメディアの会話の特徴」日本学教育・研究国際シンポジウム&日本語教育・研究学会

楊虹・佐々木泰子・倉田芳弥(2017)「メッセージングアプリを利用したチャットの会話の日中比較」日本語教育及び日本学シンポジウム 『予稿集』pp.84-86

倉田芳弥・佐々木泰子・加納なおみ・楊虹(2017)「LINE の会話における聞き手の行動 相づちの分析から」社会言語科学会第 39 回大会 『第 39 回大会発表論文集』pp.58-61

船戸はるな・佐々木泰子・加納なおみ・楊虹(2016)「LINE における会話の開始・終結について」第 52 回日本言語文化学会 『言語文化と日本語教育』第 52 号 pp.47-50

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：楊 虹

ローマ字氏名：Yang Hong

所属研究機関名：鹿児島県立短期大学

部局名：文学科、生活科学科、商経学科、第二商経学科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：20571607

研究分担者氏名：加納 なおみ

ローマ字氏名：Kano Naomi

所属研究機関名：お茶の水女子大学

部局名：グローバルリーダーシップ研究所

職名：講師

研究者番号（8桁）：20726880

研究分担者氏名：船戸 はるな

ローマ字氏名：Funato Haruna

所属研究機関名：玉川大学

部局名：リベラルアーツ学部

職名：助教

研究者番号（8桁）：90772822

## (2)研究協力者

研究協力者氏名：倉田 芳弥

ローマ字氏名：Kurata Kaya

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。